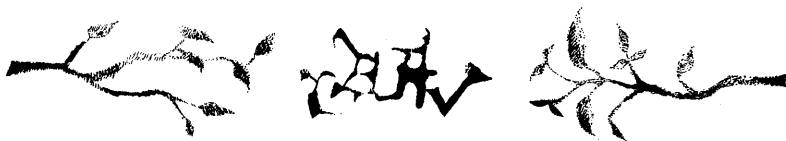


十一世紀にむけて幼児教育を考える(1)

「子どもの論理」 による子育て

小川 剛

私にも三歳になる孫がある。先日、その母親がわが家を訪ねてきて、孫の幼稚園入園について私に意見を求めた。その判断材料として示されたものは、各幼稚園の“サービス”内容であった。各園が競って示しているものは、大人、とくに母親のニーズに応ずる内容のものである。具体的には、送迎バス運行、将来の“進学”に備えての保育内容、幼稚園の“学校”化、保育時間の延長などである。いずれも、母親の子育てに費す心づかいとエネルギーとをできうるかぎり軽減してやろうとするもの



である。私のいう子育てでの「大人の論理」の重視である。

少子化がすすむ今日の社会で、幼稚園もたんなる社会事業としてではなく、その存続を図っていかうとするためには、「消費者」である親のニーズに対応しなければならぬことはわかる。

しかし、今日の子育てをめぐる状況、とくに学校をめぐる状況に眼を向けてみるならば、「大人の論理」だけに対応していつてよいのだろうか。「子どもの論理」、すなわち子どもが自分に与えられた一回限りの人生を悔いしないものとして生きていくことのできる力量を培うことを重視して育てられるとしたら、子育てのあり方も異なってくるであろう。

「子どもの論理」に立つ子育てにおいては、まず人間が自立した存在として創造性を活かして生きることが求められる。そのためには、自分自身をしっかりと把握し、さまざまな事柄の本質を見抜き、必要とされる問題解決を可能にする客観的な知識・技術・情報を身につけること、そして他者との関係を編み出し、多くの力を合わせて物事に立ち向っていく能力などが求められる。そしてこれらの力量は、一握りの選ばれた子どもだけでなくすべての子どもにも与えられるものでなければならぬ。

今日の学校をめぐる状況、それは「大人の論理」が生み出したものといえる。大人は、学校を子どもたちが楽しく学ぶ場というよりは、管理し、選別する機関にしてし



まった。そこは、大人の冷たい合理性の論理が貫徹する場となってしまった。それは不登校・いじめという現象となってあらわれたのである。「いじめ・不登校」の親子と話し合ってみると、両者ともに、非常にナイーブでデリケートな心情の持主であることがわかる。いわば、良心的で真面目な親子であることが多い。このような親子が弾き出され、抹殺されるとするならば、わが国には明るい未来はないといえよう。

現在の学校は、数パーセントの「優秀な」子どもに焦点を当てて運営されている観がある。九十数パーセント、すなわちほとんどの子どもは、将来の明るい希望を断たれ、重い心を懷いて通学している。これが学校の現状ではなからうか。

幼稚園だけは、「子どもの論理」が貫かれるところであってほしい。ひたすら合理性を追求する「大人の論理」があまり大きな顔をして歩かない所であってほしいと願う。

子どもにとって、それまでわからなかったことがわかり、できるようになることは楽しいはずである。また一緒に遊んだり、何かをする友だちが一人でも多くなることは嬉しいはずである。一人で何かをやりとげる時に味わう達成感、新たな意欲と自分にたいする自信とを生み出すだろう。さらに友だちと力を合わせて、一人ではできないことをやりとげた時の成成感さらにはさらに大きいものとなり、友だちとの関係も深まるであろう。このようにして子どもたちは自分の、自分たちの世界を拡げていく。幼稚



園では、子どもたちの自由な遊びのなかで、先生たちの愛情こもった眼差しの下で、文字通り「体験」を通じて学んでいく。その点からも「学校」化は好ましくない。

大人、とくに母親の心の中には、煩しい子育てから逃れたいという願望があるであろう。とくに「女性の自立」が叫ばれている今日の社会では。しかし「子育てはたいへんだが、日々子どもが育っていく姿を見るのは楽しい」あるいは「子育てを通して自分が育てられているのを感じる」というものもある。これらの大人は「子どもの論理」で子育てをしているのである。子育ては母親一人でするものではない。まず家族からそして仲間とともに、それに幼稚園が加わる。「子どもの論理」による子育てにはこれが不可欠である。

(お茶の水女子大学)

